



中

三冊之内

移醫物語中

墨戲書

珠

阿ナキ

トニ山

弟六住吉致書後見爲四月為向發利城用害之夏

金

由
庫

えてと山搬すよみての新小ちあ遠
豫也今乃じくうんじひくへよ佛祚乃力と於外
せんこなりとて戌秋住吉八月馬白矢刀白柄
の長刀程くれそげぬと於書と至る其詞云
海食頂礼當社大明祚妙廟天上界内院第三太士高
貴酒玉大菩薩也天祚七代神顯國奉立そ院上箇男
祚為能護國家垂跡於黑江至樂影向雖年旧利和因
新慈和光弘從蔡孙大觀肉證令成就所教分有種
權輔武田家承ちわす感不堪戀慕思從深源懇
有道承感令苦痛膺心已望死門祚以平愈する宝祚

法自山下防異敵援救自海深闊為國人為人豈地者
神力耶則內定章往月還照淡海鷗秋浪聲亦用隨嫁
苑文薰津也浦春肉矣車地功海岳利坐余座多可
超法祚子可及也爰林玄云有以不肖身恣緩怠志
頃陋形好矣奢惰慢甚終常篇依之雅意餘對正素致
猶藉子細至之糾詣所苟私辱之矣為散其憤撻起義
參近內可易來云顧軍聳山野如雲似虎曳靡旗不
幾于方云數以御方勢以皮內九牛一毛而正素坐弓
馬家怒繼箕裘雖終成咬缺牛勢忍齒蠍良車輪
若其不顧神明冥加爭乃退後慕與御願而已神憲
方精未弘權欣含神力矣。行書妙作

鳥獸元年九月日

山城守漢也朔月正素

どうぞすうりくふの行書とあぐまをほんとア
神明納支立て湯歎うらまちよちんどう。神力
天子一介に惠風はしゆ小漁くらんと覚えて
三の神歎うぶらやれ音して艮卦うしてぢり
てひ。味小凶素觀表乃激たりとてすり。竭作の思
きとよめいどづくゆる。尚弘も八幡大菩薩と同神
晏君乃神ゆ人凡人より我人と松竹みなまばゆり
でうは者とば松なよべ事とありがく下向せれ
月三日吉亥方いくさく御室あり。晦日で月ノイキ
めにて赤口月とて乃へくりらばみ日ゆをあさ
ひて六月小さだまよし。九月六日しぐのへ午未
一神いぬ升小やり。後忍れ鳥の云歎ひ三十一本憲

乃よりて後年有利。うづへひまの防ためかは
一生不用日也。ふつを中略いぬ井又りと極。天一
秋北がれよりまき小烈。一。志ぐくをきぬ。天一
秋の軒ノリじひひて是れみ弓とひるぬより有利。
山坂すや十三とやらんや。せば去れどり。あか
懲不一ぬつまひん弓がまぐるふと六月とあく
久戦敵よけらきてハ廻日り人つて利とうる地
有利。そのうへ六月より大用ふいきむおもと玉。本へ
周りて主湯角にあてどりゆくのかヨロ。冬ノ
詔小あまでハ木を樹。ちハ因よとお刻ね生みりふ
やうなるを。ゆくくわゆめと大用人あまと湯
浴。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。浴窟。亡成日。地。七。小竜
丸虎十。月。先方。也。左禍。右藉。滅門。没日。而テ烈日。
や不出。自。み墓。す。赤口。日。あまら事。ふ。よ。ふ。ベキ。
あきども。多くハ。このぬざれ日。ゆり。さと。計。う。秋
日。ふ。さ。び。足。ス。き。ら。よ。べ。多。お。利。明。月。の。は。令。戰
大。ア。ト。ゆ。ぐ。く。し。び。と。あ。の。く。と。あ。と。し。き。ど。も。
月。ア。故。別。よ。そ。の。候。い。ま。で。あ。き。べ。う。そ。あ。り。ふ。
な。ア。故。別。よ。そ。の。候。い。ま。で。あ。き。べ。う。そ。あ。り。ふ。
禮。亡。日。と。い。が。ナ。烈。日。を。天。一。秋。の。方。と。ひ。ど。り
あ。の。め。う。る。惡。自。樂。日。九。月。六。日。ア。合。戰。江。定。タ。ム
事。車。ア。そ。也。く。と。あ。さ。う。け。ま。ら。く。ふ。生。國。八。森
鳥。原。つ。ク。く。も。ち。起。拂。と。う。そ。今。月。二。月。ア。レ。り

のりりいまよ縁波がこの邊みかんともアーチアラきて
いまよ上源ミヤクよ及シテひうち底トトロを極カタマリつてとく限リミテるく
久ヒロともあく力カタマリありづく力カタマリ和羅儀ワラギ不ハは勝ハシメふ
軍カミよりて昨ユテ自ソルとくごゑへう合戰カツジンみてみのこを
救スルあまとうとまし。あらの元ハタケを取ハサウくひと近カタチを
西ニシ臺テイが方カタマリへ乃ハナシちうあんを因ハシメる。さてそ城シマの所ハシメ
たぐく。和坂ワカツカ山城サンショウものが陳ミツ守ムサシ鷹タカハゆくもあくお
度カタマリかきども江エバ川カワあがまあひて足アシづりき
とめてヨロシ。方カタマリハ大坂オオカツカとりのとわびうさ
和ハセ山サン也。よせて立タチだま重タダマツキあくふうめあて。そ一里ソイリをゆ
ゲ進アシテむとひのん。そ凡ソバンうへらん

ぐ井アシうちきうもふ引ハシメやうのめ度ミナフアリ。底トトログさ
きびくくゆのくも内坂ナカツカ三重ミツカを下アシメ小囊サカナと
ゆとも底アシメべま坂アシメカツカイ一ヒコわくす。水口ミズカが深カタマリえ寺タケシマが
所ハシメの地アシメも。あまやハシメや大ハシメがつゝてあ川カワみの
底トトロふゆと力カタマリをすら。底トトロきこめてあく。城シマ中ハシメ鷹タカ
よもハせあふく。力カタマリを下アシメたとひ城シマ中にせめ入
とも内ハシメアリ。他カタマリてあく。とつまく。あり。
あくせば大ハシメを。信濃シムガちうが陳ミツた。正ハシメも。う
あまもや方坂カタツカあて。又东面ヒガタカツカ三ミツ方カタあま。川カワ甲カタマリ酒サケれら
あく里アシメだり。を秋ハシメあうり。川カワづく。川カワづく。川カワあ
入り。河カワれたり。一二町ヒコあま。小刀サムライを。アリ。有ハシメ。

也。ソリハ東ハ左川乃サ一ぐく、シナドモ乃ヒ波江
と麻原を廻里トモシテナリ。而中鷹山ノドモル触ハ
セリ。鷹山リヒツモラウヘテ、秋又うれ大水ノ通一
町アマモニ。之麻づきシテ、三陣城キムノ。勇者
セモアリケテ、大めりシバテ、ふもとめたり。坂ヨア
リテ合戦するくろひの城ノ分ゆき日本一也。爰ヨ
ある高のえび城。ウラガラハミエスリ。なまセモ
乃ナリヒリ。う堵ミタヌキアリ。神社佛寺ヒテ
ながる殊よ大弘乃清車ナキ。其穴アリ。とあらん
みハ寺社の城也。今生後セアモキ。北
白川ヘモアリ。五郎ノヘ。一ノ毛リヘ。毛山城也。城
思子ぬアリト云。やまとさひとへ。は佐吉乃陽相ヒ
ナリ。

トモアリ。私とおぼえより

正豪軍のてなく。甲冑ヒ魯。次第バ除事
函素ゲアリ。シムヤ。シムア。云。敵ハあ。せ。ハ。乃
リ。のども二。シ。ア。シ。テ。ハ。よ。モ。を。シ。ビ。大。キ。ハ
シ。セ。シ。ヒ。ト。モ。シ。テ。大。祖。城。の。あ。シ。ア。シ。メ。シ。テ。中。鷹。ヘ
カ。ク。シ。ア。シ。ヒ。シ。テ。ハ。向。山。ヘ。打。あ。た。ヒ。モ。テ。居。已
中。鷹。の。芝。ヨ。ヒ。ツ。ユ。ベ。ト。モ。急。あ。ヒ。レ。河。リ。カ。森。モ
シ。ロ。ミ。ヒ。ア。リ。コ。ウ。大。鷹。の。ち。ア。ヒ。レ。の。ぶ。大。
成。也。又。合。戦。の。す。た。と。の。城。小。よ。テ。利。を。勝。也。云。云。
サ。裏。ラ。翁。ト。な。バ。め。テ。小。す。テ。み。ち。包。ア。シ。グ。か
リ。バ。キ。カ。モ。ア。リ。有。ん。だ。ソ。シ。テ。け。あ。い。の。合。
戦。ヒ。セ。ン。ヒ。云。信。濃。也。モ。ウ。モ。キ。ア。ウ。モ。キ。ア。ル。ナ

あてそんらんすよくもうゑびしりへじを作
とぞ用ト。りふ敵いまがを除へひよび。お懸
と御富寺とのと城を高めひ遊走。乃ちあばくみを
まへふあてひりんがらまくとだなら太きそく
どもよて堤乃けふうひそくとぞうつぶひ
て敵不。もとあとあらむ。野ざらへく里
ちらて馬キ若ふううひあ。受けぞひりべを
くり敵よくりわのりは城。ひよとめで知ぶ
正痛とはくね。うふとくむ。まとりゆく
野伏の敵とす。敵大勢。うをせぬ。れ。不す。まん
もれ。き。二百疋。三百疋。よをぐべ。く。み。う。く。小隊
か。ひ。く。へ。ま。ん。と。見。て。ハ。ま。え。み。を。ひ。う。り。り。小
思ひ。こ。な。と。じ。け。つ。禮。て。堀。と。こ。ま。ん。ず。る。ふ。と。馬
れり。あ。ひ。ぎ。か。ぐ。ぎ。、。鎧。ね。ハ。う。馬。と。け。ぬ。て。そ。
手と。う。ん。び。る。と。く。う。と。う。合。せ。よ。ざ。れ。び。け。乃。武。
者。ふ。ナ。猿。と。百。跨。も。と。う。く。も。う。こ。ま。ん。す。る。と。元
て。ひ。さ。ざ。ざ。め。て。敵。き。め。ら。せ。ん。び。る。ふ。と。、。み。く。く。一
回。ふ。た。め。ひ。て。か。く。る。、。独。ふ。名。せ。ん。と。て。ぬ。あ。び。け
を。ぐ。く。く。ば。だ。く。く。の。ぞ。ミ。と。な。う。を。袖。と。つ。孫。て
小。鎧。大。隊。不。い。隊。そ。ら。ま。て。ハ。ク。あ。ふ。き。だ。く。く。を。安。ろ
と。う。し。き。ふ。を。く。す。み。か。く。を。小。勢。か。ま。ば。二。人。
利。を。う。お。と。り。ふ。と。と。功。と。な。く。、。、。、。、。、。、。、。、。、。、。、。、。、
味。同。く。あ。れ。を。、。又。く。び。ふ。ま。み。と。う。け。て。じ。く。よ。敵

とのごくべくすくびとろんをひうるにうき
みま十きみをあふる。今を乃合戦みすゝもあげ
ならん敵れ首とゑをうぞうねへまむがお勇士
なんどのするまひようらんとばくびときてき
押かれてくぬをがくうべきじよみを下にもあき。
駆て刀ふくらぬと懲るまくらく刀をさう
てさううちせよとひよりとまくあまう。いまざ
もととれ用意か。俄トリあくそんと玉ゆよあくそ
敷内みわ信濃ちうぐ云え先方のひとばよみましきで
きつりひまじたの長さ感ハス感一丈・きぬと
布とまくのふすな同じたゞやの長さあるひま
ニ昂あるひハニ昂行え有利としてたゞよは

たまの竹とさりてくとくとくとくとくとくとく
内木トね乃一枝あり。山素嫡子七郎如喜生年
すれ次良素吉十八也。七郎ハ乞ち落くくびん身
ぬあわうて乞ちまくおうせんたくぬ事てふ
うこう也。少良もごうでぬさり。どううん翁也。七良
いまきいくさみをあひざれを眞足さんどの君やう
うぬくくーーりきん信濃ちうぐ云あまへ乃理そ
ううきうくとときりのみをあひまよべまよ
ほふは次第うりとりよ

一あ手總

三近大口せひがう

二小神モくし翁りわき
やく發を元

み近大口せひがう

六くゆげ

七。處置直書

八
卷之三

十一
卷之二

十二、
十三、
十四、
十五、

卷之三

ナニカ

十七

九
九
九

を方八次第かくわんかまともえりをく
かくる今やどりの法をそやせばは與多様
あきどもみてあらざれハ角くにばれもハ
奥列下向八時の次第也

上矣の端々事ニ乞イ カモ承羽毛ニの又也 又
羽を以てまにヨラムアリテ ぶらハ太^{ミツ}小^{ヒメ}也

からもりてやみうえニもさへ一もさと口傳あり
あるひに引車。轍よに傳わるえ大抵すめひ乃。
毛不口傳あり。駄ハカトリのとおとせたくひ
小出附酒を力ひるりあり。さうづきとはうむさ
ふうとへどな。ふうりてあよて。とそらうて立ち
なうとひる。あやくとゆてとる事。禁忌乃次
茶也。さうか小義もてう。ふみぬく。陣とくふ。三
冻を序破急。よあつる。ひ。一。八冻のみ。冻破
が志林よ。諸葛亮が作。て八冻の名。云。天地同雲。云
龜鵠翔馬。席習。大蛇蠮。又。云。孫吳法。よ。素善。う。報
無事。よ。八冻。一曰方冻。二曰赤冻。三曰。北冻。四曰。白冻。五曰。黑冻。六曰。衝冻。七曰。淳涅冻。八曰。厚冻。九曰。

又子房こぶが八陳やぢんより奥鱗おくのり轟翼長蛇こういつながへ偃よひ内うちお陣じんあり。大
於多隙だいせきハ山河さんかと被あリ。あてを勞なぐへ因いんよめの爲ため。山嶮さんけんの防戰ぼうせんいたるを河かわ又せ際さすハ川かわと並なが

ありと云い車くるまあり。一竜りゆうよりあくび

其日乃その内うち乃その急軍きゆぐんさけびの聲こゑとなりて合戰あつせん乃その勝かつ負ひとも敵車てきくるまあり。に儀ぎ一よする内うちも三卒さんそくトメをそくおりりほよう象ぞうを。から内うちを一交こうげで免めんはよくなくらうを。その於おが。敵車てきくるまはつづふと。三首戰さんしゅせん酒膳さけぢの術じゆ也。山坡さんぱくもえ。がち具足ぐそく乃そのすいくと。トメ不ふねする具足ぐそくが。もふか。えそよまがんせつ。不ふ禁きんの夜よハ大略だいろく今夜よグと。めかてあるが。されど。

行ゆき。す。と。も。な。ぐ。ゆ。べ。く。ば。ご。の。ミ。ぐ。る。
を。一。も。り。ふ。と。ハ。山。坡。も。七。度。か。ふ。ト。ハ。太。力。み。て
い。金。と。云。信。湯。す。七。度。グ。を。刀。と。と。り。よ。せ。て。ゆ。る
か。う。く。も。あ。も。り。一。交。す。一。ゆ。き。ゆ。く。見。ま。ば。事
乃。外。不。一。せ。り。そ。り。て。あ。一。よ。く。う。り。ふ。き。じ。か
代。つ。す。一。せ。り。そ。り。て。あ。一。よ。く。う。り。ふ。き。じ。か
中。か。で。う。ぶ。里。す。信。湯。す。云。か。か。ふ。を。刀。と。お。て。ハ
思。り。び。よ。け。グ。と。正。を。が。れ。で。ゆ。ふ。あ。も。せ。た。ま。そ
ね。を。重。せ。ぐ。く。ら。や。く。い。太。ざ。ら。ば。玉。す。ま。と。れ
仰。ハ。用。少。を。さ。り。い。き。す。互。カ。ウ。り。う。が。う。り。あ。の。く
方。か。て。持。ト。キ。刀。使。用。ア。ー。か。く。き。く。い。七。尺。三。寸。ト
す。上。か。て。ハ。大。ス。ト。い。と。り。キ。刀。使。用。ア。ー。あ。よ。そ。七。尺。

おひあまゆうんとおやくみうすゑたくれアト三
ドラさざりゆてすよ重へたひらせふもくき
りとあるねじりく。おうわきあはくまのをぐ也。
柄三尺五寸小刀てたり。信濃ちうのち刀ハ吉家モ
双乃名作あり。も羽院の湯内はくまきんたちと登
人みてつりく。もくまきん祇泉苑の池よりげ入ぬ。
ある財物とび来てうのいあよ入きておれたち小
さくまくら人垣とみてる。君み皮たらとお出
ぬぞれすり移ぬと号と越後八國の住人平賀志郎
はくへしと病方大明神ふとそまうゑそのうまる
が一地があまじそとまくもうち小ひきり
とそきびりて化かうとり乃づてうつとうほゆを。
びんぎアトよまでかのとけくふえハナガ
ケよくひなまう。おいきもうとみてよぐれぞく
アト有りあ大奥足きらとうてよあまゆやう有利
ともあゆうきあく。れあく。秘庵きえまくかく
七度死アトぬくせんせんもいふめをがれめなうに
よあこひく。祇園林乃やのぐくふとくわくまうい
てよなみとをだやとぞいとまくふうて自余ハ
りち具足おもひく。おもよとばかりばりげあうなま
うである。もくりのきやまうてハぬけうる。ま
せられすみ跡十疊とぬくらにてくひゆを。おつ
とりこりておやづくておふゆとだきそくハよ。

又本戸はかどよる毎てまちのる而もす合て
とうくとうりふせて敵アリキとともをぬまれ
めりとて大刀やくばがり太長刀打り
農次弟・近素姫子七良行豊鶴越後もよ歟之事
あくよ山城ち云・我者年やす三也。か年よりいらと
うみひづるをねをらぬさて・群馬の中アリ
まぐもぬうもひ残刃そんと思ふるや。そ
ぬねりゆき代丈イハトツけて云。それやろとゆふ
りんとまそくれかサハタスハ赤白ハリコトあり。
あまハ浪陽ニヌ。うそ白とへ老夫考乃しく原生室
足治世の農利久のふく。あまハム太ム佛生喜
あるひハルの八人感十の一丈アリ。アリアリタメの

三室の冥助自強よ成るふよりてふまよト名
をもあげあらがり死と云はん邪忍えうつりな
きを宿力のかどじそあまてん罪とかうかふ死不
死とひくさりを事ぐぬしけきとも行ふく凡そ
死ありせぬかてかうなるハあうげなる父兄を
撃てみまんのれおおくびやう力なり人なり男の力
ふき一大車あるが、力となぞい名とくふさば
してひみどきふたまひとこし私を打たとすと
こうとりふとふく孫にきもあふ「クみ孫」と
へもすべまい。ウヒウヒのれ死とてつづ
りの、とおはり。ぬとアロウやウムべま
次然な見又敵よあ、御子豫もあまニ子豫もあま
ぬよれにもむかひふすを矢面業よを死す。も中
みをとくまていくじ者をすみえつうとまのもの
ふくよ因縁をあざさざどうりわもとくべきとぞれ
きはよめりてひきうちて所くうふ、有りあまと
ト甲れ考うと、もやくじちあをひるをゆゆうの考
有利ふくわとつと、お家武翁みどり乃ねあひと見
ゆくゆて、室のほがせんとてらとためらふ事
あり、それも各別乃依うと、まげひくさり有利て
引うつて、うと、一人おとくぬは、おき上甲ノ若也。
連じて、甲脚をまげひくことよなうて、ハ凡て
ぐくきがうばは、上ふ一言を食ひかわんじる事
かく乃どくゆて、挙根かうあうみてやうもやく

まよと上この様とひそへそり車を帷幕の内
にゆきりそくかつよと千里のかよせきの下に
えらりとす祖とひひて長子房りせばやめ竹よ
ね也ひとてこうとすれ車をまきたりと
りくともひともよりて歎とハ泣泪を車一あま
おかまめのあいとあくものけよわりてあす
を致とるつすゆふえ方をすき地ト思ひて
ふととらへ不もやらぬふわらすみてハ
歎トあふてやいとをくきちりそきてハ丈ま
とびひてそりよりとめくらせかく乃とく念
ゑたゆる車かく平生よく死ぬまは死於とぞ別
ふなり下よく我とをよ云古歎ト

我ありとありよとぬとすてよとひ
おとは食乃あるアーユリて
とよま佛法なうせはみを通ひ了波也入貞心と
トあめ志もあもへねアーユ勤修あるを貞
分別よかアーユくくりのくれ上よ苦樂恍惚
の折ふつけてあくアーユつらうこくうれふ五
たとひ大手少手のまでああたうの貞ふまく
うらくへまにあには大丈夫乃うれはせ又もうちを
うりそめれ事ととくめて食と茶灰ノしくくみ
まげられおり是甲セとやせんたとんも食ふも
たとくとみてね人けりでひくつと小瀬あよれ
うとく次よ対すへきりをら教くまでを弓と見て

さるをめいよともを歎急不^ト不利ぬまへ人每ふこ
らへとまて具足とゆきあもせスナリはよテラひ
かは弓杖乃るうても歎をいもくとすりありあま
矢はレトモくぬゆ人取もせぬハ大里やくか
ふつ^トとぬきりとそくとまハれ歎を仰ともも
うけ我矢^{アシ}にイチ病とくを源乃頬先歎
をうる事月のれ代トモ乃たまゆりさワリの
君ねハ歎よしおへハとて眼精のりそり竹^シへま
ふわくに中根乃モ既いさくうおくするふよろの
云と思あて名ねだよとかくあるそりそれふん
よ^トした^トなみ^トそ肝弱よとませいさぬさん
クにあふと内え^トり親みてまし老乃りひー^ハ
人海よみをすをきりあふてま名乃^クハ^トリふ
んぬ^トト^ト九十九夜^トと^トと百夜めふ
物^トとも勇士とはりふる^トすなと度よ海し
て^トそりひー^ト色耳にとぬま今サヤ良^ク御みを
ぬの甲板ハ走^トてあうてきみもせと云あよりと
ぬ^トえ^ト色^トの^ト一^ト人^ト車^ト小^トひ^トしてうふ^ト
あ湯をせひと^トのをあくほ^トりく^トとあく^トハ
日本一みきん^トの^トつち^トめりと七良太よまひす
みあく^トいき九月六日^ト小室^トハ鷺越後守
きゆ團^トかし財思定^トしゆりて邊の事^トく
りく^トゆき^ト一首^トノミセリ

あゆさうもひかみせれ君乃^クて

久らぬみち不思ひ

みちくとまきくみても守を横より堺川を越

かと我國乃名無もひ風をふきと思ひてわき滑
川を過りハシリ出放生漁村をなしく石波山よ
善不トナリ右マレモトニ忍まはえ邊の山とかく
シテ忍えて越中乃國もやくか栗ノツケガ
木にて加賀の名みそ善に多竹の橋今淺瀬より
邊水を引キトウヘ浦風をくさリサヨリアサガ別苗
高木ばれくちゆてうち死一てひきふよき名残
あすきありまフニホえてだけ乃至葉代落毛も
ナリ人井後うとおりふとぬゆく旅名月上りて
年とじりててもぬへまほと思て称へゆく田
舎ヒドをあく純乃森もひじて
いきへれ人の没れゆくゑも
おもかげア露ひぬつる巻原
越あやく人の山とよみて

ク内く波やふ人の教乃諦すイ一私心をとめて為
人と取り合ひ小歎れ中へ引退後廢によあふて
勅撰よりうんすときて久氏乃やぬきと残
竹ふをやりよよを弓矢とも力はかくあゝぬけ
ぬめあうあと及しぬ力がくさりありて
ま続り又おもひを玉の里なし

ひーーふくろ乃ふとあこもや

もうほ詠ひそくとときへやともかく中略ふもや
著よりうりば越後すうり死よらぬふけーーハ
轍ふみてお豆粒とよひも葉小云哉うち死せは首
そ敵よどもあくとも力乃もとはおあいめてゆりの
がうん清傷の痛固ふもとてまれきよひぬる

ゆてか離さんと云ーーこそ義方毛とてげ
合戦アリ。うち死セ

一西方軍辛合九月六日合戦致追善葬懸梓事
祇園林ゆき安乃とくニシニよせんと儀宣にて
大手乃太ねやは東市坊玄鶴湯対博士知財院
大和ち誠巨山馬判友長毛鷹山羽は橋室克務の
ゆき日常暮梶木工亮清保不夜次郎明自持
牛毛平内左郎武春和雲日秀ちうりとよせ
とーてモ豫一万余鷹也ゆき奚漏対博士ケ益
ち處しよへあせ用大明神と書いて一揆のあい
とゆつけ多とりひきんくめも乃太ねア

と鷹丸湯の舟仲春嫡子次良有三同三良季春勝
矣源尉如季簡を平ノ良吉委舊を源五郎希代鷹
小左良子委是おと先とてモ勢三千余稼から
そら母伏教をもとれまことめとこめてそゆふ
きの中鴨よハ内乃具ひくとて打立なり
大手の大山城守正素嫡子七良如次郎素吉
正鷹信法す長子鷹越後ある直鷹た中大鷹
刑部丞年太鷹茅力先生奥住味村少次郎毅烈を
先とてモ勝二子余稼もてふを野乃紀伊
す長食み佐を登位時孫次郎秋浦水鷹又良仲
鷹九郎ぬ行雲雀三良吉登焉か將好教とすにと
てモ勝ふ石余稼もてへからま青野ゆ乃
たとせりつりてニロアキとて信法すむ孫との
アヘリのとは城よおし玉タリ野力乃大山をモ
雀坂を承くらひふせんかはの股モヨネヤ甲小
柿乃ゆにて揚く赤うるしへり小秋ニモれうわ
モウ赤やうにあのかて一うく若茎引つ縛てね
とりぬぐるい株一方うちをぬるくそ刃をも
タム山城す門あふ酒と力ひさうかふうちあり
から粟也茅の糸みて酒をうひてえ万八千乃い
くさ林又向神効替つむれとけいくまにから
粟け歎とう堵あそひとまくかひて馬よ打のりて
白もと一かうきとくやて西乃度芝ふうちがよる
その日のもやうとくおりりやとたゆはあをせ

川りうへて白糸のよ海ひ小同——あり白刃の
きふと三月内月うちやに白鸞のたちれてあす
みつき乃と称みてすり白くさうふらぬ事の扇
ナサ人白を刀鶴うりふるきなーせやうーうる
白羽の矢ゆひとまことあく本ハ弓のちてらある
るよ自轉ひひく打までひくへるしくうーあり
りま大ねやどそぞえたりクア嬌子セ郎ク紫木モ
絃軍ふもくまでもあくわわりをたちもすりなる
あ民考のよとの忍入爲なアリいまさいくさふ
なうもひへやもあらぬあか教風情ゆてうち哉くろ
ひてむくへうるうれそくく用向取君達がん
とくやううりともそせ不足ハウトとそみんなり
タふさるやとアトよせてうらうらたり薪水ふの
をそそ大キハマ奈ハ捨をおわさせて京極の御室
ふぬ玄済のさえれ神乃まくへみて三とふりげては
大和も大ぬかて下くとのと城主に一と山を判友
神えもんとどりアリ一と大ね东帝彷中懸乃通よ
ひうくうらうらうりてハ栗田口ふうりあて法勝寺
恩澤吉田の馬場といぬ井へひうひてす畠としら
九月上旬なまは稻葉とわうる秋風ハよろひり
神をひあくへし雲ぬ不ひうれ稻青色くよと
のうちとや照らんみ度乃宮源和の後一時殘火
欲滅財太もうめでうちよきて一をアリと火と

津くお坂みを付とりせとり中よりと鶴濱慰博本
ク一門の時のもの三頻や頻八度までそすとタふ
山岳をかきうためりくわき河めもあまふより
て見れク人ふるもねえにり詔たくし矢さけ
び乃教とひよこよせての大將吉宗系の大
主海ひ又付する日を乃よとに黒所くりれ左刀
と右兵衛のふはれうろとつけうち矢刀やナニ
ト多くたくゆくよむりんのくと玉て思うり
うひけてそ素そりきるあふミケテ後へにさら
あり大ねんあけて多の大らやう東京佐林乃吉吉
あまよわり山坂數きり月くふそこひやうあまれ

夫一のまゝせんほきせあらうとためされよとて
十二をくそひうて承たまませめてもかにれもそ
ふすみゆる山城ちり吹う人トノリゆきて
うしゆよのうへたゝ鴨乃手けばせひひやうみて
えび入ひへきりうりあまもこひやうなまともは
かるやうさんとて十三をく三ふせひとてかつて
もあいま玄ウゆひけ乃袖所もとばつてうろふ
ひうへるとのほ椅室えりむびくつけうけ
とく減せはるゝうきうき不一度よきりあやう
寝んふ十三をくとのかくもとてまとあわとこめ
てう勢よたりうとぬつましてひえりこうふ坊
あまた持て児同宿かうけまきしひ原のあま

とて乃ひよんりよとそえあひをす爰み城すより
（ひひや）のほきなるをゆうしてとニ三てうね
きてお玄（くろ）べまへわアト（こうぬ）にてれめに
忍まは根へ縛乃（とく）なるを乃（ら）こすても縛乃（ふ
く）いの羽（と）くね即（よ）とほあ（う）るウサ（小）
リテナヤホアト（あま）まれ鷦（よ）越（は）す正（ま）年（と）や十二
と書（か）らうさあ（う）れ（な）もやけ（う）也（お）去（く）とより（い
山（やま）を（あ）れ（り）もあ（う）失（な）れ（な）は（よ）く（あ）た（な）ふ（が）
ト（あ）れ（う）さあ（う）れ（な）もやけ（う）也（お）去（く）とより（い
小（ち）あ（う）方（かた）あ（う）け（り）え（と）ま（う）と（も）ら（よ）く（あ）ふ（が）
（あ）く（あ）た（な）む（さ）（ひ）あ（う）（一）（數）（の）り（よ）く（あ）ふ（が）
（と）我（わ）あ（う）（あ）り（さ）（あ）（見）（く）（れ）（と）（同）（じ）（ハ）（う）（ふ）（く）
（み）（て）（敵）（の）（わ）（う）（ひ）（く）（と）（る）（の）（れ）（り）（中）（か）（一）（合）（戰）
仕（し）（う）（ん）（と）（そ）（一）（名）（の）（一）（接）（乃）（輩）（ス）（百）（稼）（り）（う）（ふ）（め）（ひ
て）（う）（け）（だ）（わ）（先）（す）（よ）（れ）（本）（ユ）（名）（は）（保）（夜）（た）（う）（け）
（け）（く）（ね）（え）（む）（せ）（し）（ひ）（き）（の）（う）（け）（く）（て）（う）（け）（け）
（く）（城）（方）（か）（は）（致）（あ）（く）（あ）（車）（な）（ま）（は）（堤）（み）（う）（ひ）（て）
（う）（ぬ）（を）（て）（行）（な）（る）（く）（う）（な）（ま）（は）（堤）（と）（ご）（と）（ふ）（を）（す）（ル）
（ひ）（ぬ）（ひ）（さ）（な）（き）（ふ）（せ）（く）（て）（あ）（れ）（モ）（と）（か）（ひ）（く）（底）
（す）（と）（す）（合）（く）（く）（く）（う）（な）（ま）（は）（堤）（と）（ご）（と）（ふ）（を）（す）（ル）
（移）（通）（し）（馬）（鹿）（老）（さ）（も）（あ）（て）（つ）（け）（み）（う）（ま）（で）（す）（と）（く）（堤）（の）
（う）（り）（と）（ゆ）（く）（い）（や）（う）（上）（下）（死）（定）（す）（る）（夜）（い）（く）（ま）（か）（ま）（る）
（ま）（れ）（ぬ）（れ）（う）（と）（移）（と）（後）（ら）（ん）（い）（ち）（風）（く）（う）（や）（う）（乃
（の）（も）（の）（く）（せ）（明）（し）（く）（れ）（歎）（味）（方）（さ）（く）（ふ）（刃）（と）（て）

よせてこきつづふくとさをきからて馬のたて
されおとほアトキタ山城守を勢ひて豫ひく
たりトうあまと見くつしく敵を待ふをふく
クげ居ゆりてとばれ小ハあまたハ太陽よハ勇士
ハツムミヒとまでする名乃曲となリあり
比の勝やモハあわいとよけきとて七郎次良と
ちあへはもす小モトヨキその大内東帝佐敵
をくのくみそかうヤトハ山城ち四素利目比の
あらんといぬトそたフヒアリク見ゆ人されと大吉
あけて大ねのひうへくる二千余矢うち中へ又百
余弓をかうろアリク見ゆ人云先と見てうわくや
うていはる四月の常日かうくうんとおもひ

山城殿の事事をして勝負せんとつふ山城ち左右
もやをよふとて又子三猿右余矢はうによすみ
同左トあまるやと乃大をそくともひりめトて
けひぬまはニ千余弓うちといたとあけより
うしゆくはとうけぬきて川人トて刀連を殺ハ
す場と云ふてつもも代ともその殺ハとす五
体と歎ハくくふみんトる所と又子三猿トくして
死し一文字十文字よぶつりてとば里七郎トく
追て死ゆいをゆそらきてるゆれ時ハ次良トく先セ
ふきりふ城ト多勢トよみて歎ハ後ハ後ハくむ時ハ
七郎次良トをせて三トふりてくげちらく
ありあるをすましながらまことにありへふあり

をよけするゝことをへ又左ノ移ふゝともや矣
なるアリ いふびしりれシトモセトモあきら父み
三稼り日かくれ而ノ敵こうてきのウムヒモル
レモカツハタクレ東ナリ西ナリもよこモラウヒ
ハサケトシトモシテハヌミトモ一ホ
ハヌミトミニト五面紫ヨ敵三面キモリ小方利
ハタリ山坂ち云敵セハシタリノトモテミ大コ
よりわて乃トナリヒテにうけらズモテハカ
クハヌミトセテ七度モ次郎モハクミ称くモリ我弟
モ忍キミ三ナホモルハセシヘヒナシトモル生
ばうせソ良そクハナシハシセクアケノトモア
ミえトロ軍兵モ大略ナキモモロヒテ太刀モ林ヨ
つき感ハクシナハ惱かウツテクヒキウムリ
アリハトモ日モアテ敵の事ハムニシユクミンナ
トモロヨモ譽信法さあキニ面稼ヒヤリからハ
内ハモコナセテキメハ入りハナリ去玄太も
あけて歎ハ小殊ナリ一父もアマハアトトキモ運
ヒミモ打壓シテモト出で太アラ大方モキモた
モトモウモアリのつモモルハナリ太陽ナリヨリコ
シカトキリモラント禁食ウツキシヒトナ子
房ウ術ヒ益シテ親シワモミ子残ウヘリモヒリ
メハキハソリモクシナハナリ天ノ勤シトモリ
ハクミヒ新モアシラヒトモエテ云アシ激するよシ

多勢となりてよりも信濃守小内に金ふらまでり
小内より落葉のもくにあく小内猿山にて二百
豫山より雲からてひぐる所と又すすみかうけを
ぬつてりんちんへはとつけりとて凡事は味方
ニ可きりり小内にてたゞひふゆきとほきにタク
シメてゆきうねのトヨリ合戦トマキヌ川
ふくして敵をひくすより河内紀伊おび大東・曉
川の發伏いとさる河内利高紀伊おび大東・曉
川ともちくに今ハ敵をひくそくをゆだんし
て大手のいくさにてんとまんと中野よりぬ
あく小鷹孙次郎ひひりひあじゆんくわ治承
元暦乃合戦ゆき宇治門をたひを海せはすそ渡し

づるみあまやと乃小川水ぬなりともいくやとの
事つあるへ後湯海あまくくまはをばらんへ
まひうりふとよもりくが附不^トま^ト雀三郎又もく
みやてかうや一志ハ風^トくと三月の夜もよ
名とよる^トや雀三良友京^トも登矢一はりせん
とて八うくニふせ^トひつてをあつ不^トうむくへ
小を即ち^トてのあらにくのまにせめてうちし
れもあらゆき石よあひふひくらやひどそ一交
小をとそくひひふ^ト金音云々^トいふひ
安^ト有利^トてとうかひくらちやく^トニ良有春
月三良委^ト又み三猪^トせの二百余猿川小をと
すへづり毛と見くみをこげく多もこゑ田うを

をえりとて於合三百余疋我とくとうち入て
うれぬと内にねりとくうり城とこかほと野佐
からたちともくを安とせんとくふせきとく
とも各とめうるつそりのせなまは村とときた
ととくゆうみとこびたの岸アリうちあられも客
くも代子よつけあきまで城内中にふけことふ
やまとふとあく老おかされた不せくとふ
る力ひけ場とくがりのよううひハヤフリカケ
きと又车冻へ引クヘシトト西具とぬいて水
をすうひとろひととて馬とやせめりきとつま
タふ丽ア序の紀伊ちゆり来て大よりの川云
共今めくらわくぬき弓箭乃寛加つきゆくまれ也
川をとさぬだよそ会かれよあまのさんみくと
あほくうとする奉ぬとくにりのくめんやくか
あくまで対天をひきつりと致とへまよてふまひ
くよとふたよあひるきだのアトかなにて轟轟ち
なる馬よづる乃ねもりうる貝くららのくづら宗
六尺三寸れ大財よかたよづる家やうりゆつとり
て川へもちひする次にみ位を略ノ一文字水竈鶴
雲蘿草とすれどくうてそのせのみ百稼もすり我む
そく一也うね入ぬりとすりあかは心はくら一
疋色あらのまくわくともすくうらあつて紀伊ちゆ
まんよすくとくうくを敵へるふくと玉をねじ
ま志むるるとあく具足ときてたうひかとむとも

えれやとうとされえさゝれ大勢うんくう
けらううう縦てうとれりの教をあす紀伊す
をうる而れ大なるふたよまハナラうそひにす
のりうる馬へ奥れたまくせもあくううはふ
はふせてうふとのうちうろひ乃袖ともつてにす
ちからく馬も主をうのくくくみゆきれふ乃袖
ニアアレとつふすなわづらとくらふそつふ
ウヘハ詠祚の風の紫とぬううて古事とえれトホ
とすもは紀伊ちハツちいくき一木
ふうりよせゑれくくと所をほーくか隊へうら
あけてひうへうう風精利仁田村ハ鬼玉とちくう
るすあまとくさむかくやとそく内えづる去程ノリ
大手乃いきへ敵みくとよゆひ死をお内くうて
そん一そんらやう乃りの教をあめにうひの
いふきうけもせびれおきせんよせてうらきみる
よこくめどーてほのめにけりてひうへうりふは
とりハ海寇皆士れいとくうのそれの合戦へま
敵れ利とみえにりあまやくみかきへきするハ
思やうふけりのむじりもれか馬城シめて不
たゞく敵うけりのむじりもれか馬城シめて不
すむまーを地とされハ小勢乃大勢ふどうこめ
らきてハキミトクギキスナタ大勢ハクやう
のふをくふうをうるをりくうくうまで時をうり

もへまほりをやかきんとひよまくにうの八咫くれ
な村の大いりやあらんのことく小川風よふとあて
二千余疋うさんよぬけてもくみより城方アトヒ
山城す父子三疋も讐信濃す長尾鶴越後もす立モ
勝八百孫ゆめひてかくす立その日乃ちやうそく
ゆき白糸乃太よりひふナハヘチヤノの孫りゆき
ハ大い波音山をねへれりとくふかけづらめ
て白あゝもの馬白紫ハシトカ取リトのりてあ
えあままれた刀ま内スノホトカテカドリてかくる
クササヒミミで見えたりはくつもぞれ誰も
そ鷹ち中ね鷹助鷹利詔無縫常力先生味村小政郎
メテ見どそその路一千余疋うさん信濃當
よそそひるべたてやうと見て大あわげてつとく
敵乃もとてと見ひまわりゆふとくあはれト
こうぬけのてやうをそうがくかぢちよ同と
くりわてけはくぬれくかと下知してゑとけも
かく大鷹アリけゆせゆんてふあひつけりて
みそむく敵ハ多隣なまきもこたゆれとほりけ
ゆそ信濃ちうのりたるにせんうへからニ可アリ
うへをきるるゆゆ敵キミセス八寸の丈馬とも
みゆりつ禮てめハ下に刃下てきまはううつね
とてぬかうとくせ敵乃こひちくさよりもるき
をえろておとせりかとてうりうふとみてみ
てハナタナ一切ゆをとじまとす進退アリ

軍矣ともさらうとせぬ中に一隊當より勇士の
あへ海はりひとゑたり終焉魁惣士ハハラモ
きりねとされよととをうちれをゆきこひとい
きらせはとくとも乃テテクヒキカヤ)小くひ
をくづりけりとりふくまでたゞか鶴越後す大
きうくと持てん——もきりておとほよむよ
敵そまきハ利々あくのまや)のつもりの二三才
さり切てそのらはん大和守とく林で鶴越後す
あまアリあり候大和守の内くみそす)と目は
せ勇ゆきくとあくてすとしそトる立あ
きなさんよじらぶふれ敵よハ不足あきともすり
とてへてうるわめ代ハ傳きなうてきあくハアそ
とそ八百余稼アトてひぐんする中へけ入ス
丈加すふを了すくらうしてう勢よ々りモ
そくの敵よアリしとらうとテ三更又にヤテケテ
物いあんのじくふもと傍傍アトてまきり故
乃きうやう移んあらよさよト多ふとがん山坡
七郎ハ馬とひさせたりこうて大だらぬよりちて
と小河とれどれあくハ岩と金とおもむくかぎん
ときつてゐるるあてふじうふ老なすめくア
うら民考ひとすみうりうぶりのなるうるを
誓ひよふ物牛を平内を貯と石のりてうちよと
ゆとふふてアシテアシテアシテアシテアシテア

やそうてぬらさじとなりはらめ是處をふ
りすふけやうんとてや尺あま三尺をまへ
水くふぬ不まりゑあやくを多くかく山城
七戻まのまち下輩の屋代り也をかようとま
おりへともふくひくまきんとんとて太だら
そもそもめてまだりうよといきがよふたとせつみ
あ内うちうよとくゐへてねたる具がまほえり
なふみたをれまくけもとあてなあとてやまひ
具足トキりてありとにくよ而そくとんと
ひきてこゑをばせりてぢやとうにま直ち
刀付にて目鼻とさうひてむかへくふきま
えうれあれでのまほやけよとふわん詔
とも二れもてアサおてやくふうり敵多勢なり
詔ともよき有子孫をすりえとまでを負教をも
う我をまげふの合戦ハみづまけいふきア
成ぬまつ冻とひあやとりひそくね我アヒム
とひくかとひがくひや)詔アシウラヒトセラまで
を刀打きかたと持て小けられも九月六日ひづ
の刻よつまはるてにたりらくふひよりああせ
きをあらそぬくそく乃やくかまアカヒヒツ
アふとに首詔まで爰アヒムケルヒク又軍
アヒヘアリゆをだりうごくみえだりある小鳥ア
色アツツ川とわらわをくらひをためを

人未だ勇乃もとはあくびかと云ふさへ思ふに久と
ありてよく遊奢風流と乃こそのすくんづりてハ
トヤとぬまんしてへ口せよせまではあまてん
なりのつゝからあきえを思ひし只今の風情也
仁もふせうと老くるをゆうきもそれやどりふ
ゆるまひしと同ふとつけ年あたりともころもや
くよハ西とみはいくとゆうるるうあすし
を我力代をくまうるふわすらむすりのな
ちうをとりへもた理並軽して是れといそひう
きりつとも代モ教とあくねうこせ中に大和
園三惣ノや承あわらゆ鳥もよがれ小京のり
して祇園林下にまことをひめの鳥乃は入とそりと
すト多ふよじくやとくくてうのうんあきぬ三惣
とお一内キ父母ゆとあ子よとやうてゆ里うん
くくとくをもるてうそ出つめさくめ方きせ
とりひなうとくに弓矢ともガとてうわゆり
ぬしあ御ひヌとく人所みうちふはの轟ときくし
そりも達なる鷺や羽は橋をも東山なるふよこさ
入見月宿乃歓車りかくは橋ひととみふり
くり一児鷺若狭とてうりすてふたり道野ト
そり多ふ時思ひのあまやう

巢ノノク人ねるるれとをひない日も
その別乃ク人ねるれとをひない日も

道學焉と云ふ事——ウハ私密乃才ふともありて惑法
老回苦薄と一感理趣ニ味ヒリ——般摩と云ふ
一日後を書つゝ起と嚴重の追善也。丁度九月小そ
學師を禱して祝はひてうへまいかくく乃あ
子泣歎とも珮珮とわざりテ——ゆと小さ人アシ
珮珮とんたらん——其御云
致白幡珮珮事

右志巡先生仰て寫法橋上人佐出法力修行門沒引
參力場迄來考甲子み十有餘春秋終弦爰移妙計爲
毫七と五旬光景爰往而文法哀傷浚新所教別體腸
依之弟子向今日便場作妙法功法九乳梵鐘聲十
号す。馳喚呼や書鳥馬首乞乞併頻伽唱法西方今生
前托糸を拔示九厥有頂安乃鐵圍沙界鑿勸含寫同
達佛果所修妙件

鳥龍元年九月日

あ凡人の苦れトみちらりのうどウ
なうえぬ旅よ社ぬらのう

學院うのちをよきわけて没不ひせひにまへハ
満度三多羅城五りりモ後辭吟因縁かうト玉く正
て豊鶴ハ古とのるなり。于佛もあさ玄の菩薩劫月
祝元く三五しくくく成懷——て詔五重乃祝元
外小志ハ三九重安樂以至待の理。とわしりの胎
印還化何そ退沒乃夙のうまん弘忍魔承とも小
別離の恨ひゆふもれ畜む。うろ妻裏ひうれへ

あやうんや掠さんしモ冥王為比一差ちやくさ
りて圖は乃接縁あくにきこまも天ノアホふて
をとくはらされへ生れハ別地よさきんても乃
クまさらへかほ乃あとりりうめふウカ鳥龍
え辛唐一致の軍急さかトふきかかトキクか九月
上旬後三世代好なしくつきぬつゝくはすりと
ク人ニルまは白れハ云ハ朝より毎京を比叡山ハ
齋よ詠め紅葉の林れタ少き逸興と毛石山小屋に
勤芳つ院みは清お信ト家事經寺みはす護持と
正海中を去乃奏上とひよしてハ三承穴宅ハと
そり小あら役と利にしあ小炭ハ魔あすとす
めて廟碑堅固ハ附せひよりと更興と地ハくさ
みと見そハ鉄樂ト一世乃きこのとりゆくハ活
計とは西してらみみとたのトみ日残す海こり
ひるゆりきてかそふるくはふくわせりへとも
一化りそゑまで三途トアゆくとせ井底を深よ
翁の浮城乃境ハまわうへすまうきのひたれし
みを夏の豫ケヨトリよ事とあく小瀧浦その敷
く中ゆをか人所瀧浦并一首の古詩殊あり是
かほそや实く溟窓の魂とけりて苦代下をい内ち
とうすり竹よりんそれ亭ハ和園乃吉言ト
てみ七又七ノ乃句毎小又大又名作を表ト三十一
字ハ是如來比三十ニ相のせる頃ねとのそき裏し
又三十一字と讀欲する功酒あり且小刀シぬ思

神とどりもとまきとおもひてああたまひうけする亡
魂とゆのむすり湯神をあやらきひうん進善の法
ためアトヘモリヒマヨ湯利並成ルシヒあるる
クシハ雅クあまと物云縁起とシ源志めん大持化
院の首脣くハビトと美し経テ五ツミモ電
モ子言投達磨アトウヒのヒー附アヘモアミ
行思山乃すとて詔旨ほアトアムアの詔を
モそとされもヒルを川のかのまとくみ竹ふ袁
傷ハ和歌激よ忠源たりとにあまた老怪めいとく
仕は次アト車長くく一モ接小久須泰姫宣に
モひかく小もとわヒーの女姫宣を訪ひて後
のきともあは乃兼ふ承て恨うる教までゆる
又我れよへるちれ児近アト先立ドリ一ト
嘗とひて思ひとせきみなとく伊陽毎秋奉の禮
アテタシと承是也とあつたる小もとくかく乃
シトモそと食人うんとくふたなしはゆけふ
とやうなう病序アト日とさねる所事ケリ
世は宿禰乃恩恵とおアト終夏の酒きとせきノ聲
がくまアト戦場のあうひとてあつさぬなるが
ウキをめくまよそち入様とけをみてひなしき
かくかくひそや西朝そりとつに乃こまで眼よ
ありとせあんぞくハ来て衰アトたみつすま
たくしてたゞきは源長の恩顧承を及セム

ふすくして歎きを因室の門へみ事水をた
くふるゝす說せきハ仰長れため小砾地を頃戯
そのくとく塵丈にて松竹もろくはによく次
されは死ハ猶解取入ふにて妙典毎ニ才三の矣又
即ち攀巖開示の朝ゆき世家ハ雄氣足るハ其懷と
あく鳥林涅槃ハタかは攀子因連多の憂患
ゆく山あハ大師ハ鷦々毒と云けハ眞鑑ゆくと
とく至一素所不_レ能と起て成佛久_トと云と只
志竹ふ然仰内肉院魔王のくどくぬとくかめ稱せ
をうす次暴れ本ユ名子是乃観音也これノ作
達羅乃思ヒひひくへしヒくへ小島子乃因を詔せ

鳴鐘一韻とよらへをち山玉さひらんと竹ふを
功徳りつてふゝ一拵た先考周中は明眼ハさり
がく_レ三明六通の者ともあひて果_レ禮しげく
とはとさえに_レ一委とあくためもしてや并八
音乃め未にらこちくてふゝりととあく今端安寧
を受ける佛事事と云_レて娑婆世界ゆき六ちんの中
小畜塵よりつくりをひととひへ里次忍くればむ
さくひみとの瓶補をとくう般をみくほくひとふ
ありハ說あ化はす法げ去耳根利故偏用度塵毫尽
して六根ハ中かは耳根よりのく半と正、飢饉躁情
を生の既_レ遠次顛序ハ中かにて不動法性乃
とくりわとさとり暖文れあうさめうるを教ハ他

眼とれども身へくらん様をすゝりたりと
あらゆる平生の所作を托へ因縁かすと云ふ
事あり候。そすまやうに三度や遙をまぬつまうる
や承りてくへば御をりゆく致島木免三承うるを
増進所修かくのとくかまとゆたくひりもままで
そりよ車をすば連と豫のきうやうといふす
ゆまよりこゝまゝくはとくや爰ふ葦茨等のあす
乃々けふやうすりろかせりてりの車す
ぬすきひととくともやうにて夜をあゆさ
みかくらうのみこ拂であれ小袖ひよきをあよ
ふどうりぢうちり下きて天帝アメノミコトく地ちやうく
宅らやうく内かちやうく六うんちやうく
ときよめまひせひよへ梵天帝尺や大天王下ハ
矣魔江主寺山音君五造ノ冥官司食司隸内海外海
の御玉御衣別而ハ月半圓中れ大小の秋祇殊ヒシ
坂乃篠守鷹卜上河内海よハ尼る故此の秋雄黒大
御祇和泉國小は大も大明祇が波よ向も大也秋東
山也小も深大明祇少雲大也秋東海乃小へも多大
明祇までありさうともうておとほり申され
朝ハ秋園也秋明のものちやくにあ達弘施志ひ乃
なり也そのく納吏と度きて只今よせえどある所
乃ぬうちやれ余波を残すはくまきりせ給へ
よつと人をひぬそりくらかうり渡乃
うけのるふくらなゆつけ

ありかきひとくいまのあうよしやあふありうる
のちやうようやか
せれ中へとてとかくてもありねる
正しくぬたりくとやう有利とも
あらん後ハ何アリうハせん金玉乃きほうと
後世また多く承すりかけますアトモアタ
シマリにな

子とやりよなとのぬれみのくうへふ

うどふをなくへやもぐれま

あらめ我も又くれなむの神れ森まのけ成
カとなまはもうおとしきうハさねどもり
くぬれ是あうけとはるむわと窓乃物うえ

ねれ乃村竹のタ末てへゆくすませ生死れをふを
そらきとだよきつ變ぬ力うそ忠しきれ親ハ
子とあむ宝をかね被を召せ一たとけよ我をうと
ぬるうる年ともうんかく小季ハはくうかく
是もつまにふかくおいざれ月出をすきんげ月
乃未月の中旬あハ明年ハ去歳く大成くく三月
とほえいとううと心内よねうとあなたん童ハ
弓みちんとうおせんて刃をハ我乃上と思一走
也一てあやめ抱ゆきをげくされあやうれ不をえ
怠玄をセミニ志ぬるくぬし西新立トミキ安
寧の角みまを燕海まで又来ヘ義立トミキ安

を効ぬをはあひ候舍ヤせは行版レバけまた乞ね
乃よま是成し表ハ修羅闘争の血によあまつさ
ひたまのかよひく成しよそもれらあんいトよ
あうによ済ひと成て垂りとふくまよう小通
され昼夜六時のタラミとたせさんと思ふな
もス也乃湯舟より挂替産子ノ門より入りよ
つゝく思へてかたことをのう羽風ふうこ
してんとすはく村産あきや我と力と妻み代かや
また苦しみの教へぐらやわもゆ月を差めゆふて
乃山石を乞むゆ候あ多て立ぬ處トノん行きゆ
トくにちりりされしよ老袖と玉切りうりゆ
子産後の衣着をよみて了そゆよたり



中華書局影印

